

よもやま話に花が咲く。えきんぐらがお届けする小ネタ袋。

蔵通信

二五号

2011.2

第二十四話

恩愛という名の犬敵

絵金百話

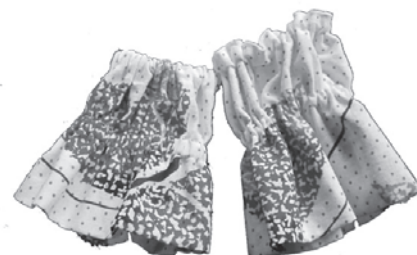
シリーズ

発行：絵金蔵運営委員会
発行日：2011年2月1日
〒781-5310
高知県香南市赤岡町538
Tel.Fax 0887-57-7117
ekingura@mx1.netwave.or.jp
<http://www.ekingura.com/>



INFORMATION

shop information



浴衣地で作った
うでぬぎ。



春らしい、淡いピンクのシュシュ。
着物の裏地で作りしました。

花粉の季節です。
いっぱい入るティッシュケース。

ボラちゃんの新グッズ、久々に登場の

絵金蔵のボランティアのおばあちゃん（通称ボラちゃん）
たちによる新しいグッズ生まれました。ご寄付いただいた
着物や浴衣の生地を使って、シュシュなどの小物を手
作りしています。シックな色合いで、母の日のプレゼン
トにもぴったり！売り上げは芝居絵屏風の修復・保存活
動にあてます。

ショップのみのご利用も歓迎。ぜひのぞきにいらして
ください。

あたしも待ってるわよ〜
by 金魚袋



EKINGURA
one-year
passport



絵金蔵にて
年間パスポート、
はじめました。

特典多数！
詳しくは絵金蔵まで。

まちの素敵を探して、歩いて。

★町歩きカバンをお貸しします★

参加方法 絵金蔵受付にて参加受付。受付
表に名前を記入し、町歩きセッ
ト一式が入ったカバンをお受け
取りください。

※ 荷物預りあり（無料）

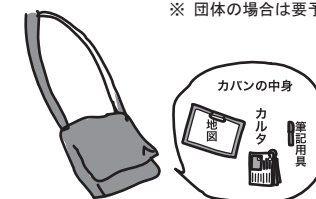
受付時間 午前9時～午後3時半
（絵金蔵開館中）
午後4時半までに絵金蔵にお戻り
ください

参加料 300円（ラムネ代込み）

お問い合わせ

絵金蔵 TEL.0887-57-7117

※ 団体の場合は要予約



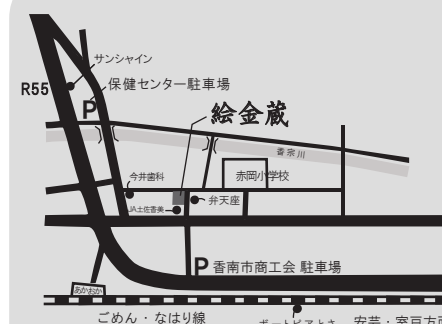
あかお
カルタで
町歩き

【絵金蔵】

開館時間
午前9時～午後5時
（入館は午後4時半まで）

観覧料
大人500円、高校生300円
小・中学生150円
（15名以上の団体は各50円引き）

休館日
毎週月曜日
（月曜が祝日の場合は火曜）
12月29日～1月3日



幕末土佐の芝居絵師・金蔵
（通称・絵金）。彼は土佐
各地の祭礼に多くの芝居絵
屏風を残しました。絵金蔵
は、平成17年2月、赤岡の
地に残る23点の芝居絵屏風
を収蔵・保存するために作
られた施設です。

絵金蔵の三つの使命

：年に一度
：絵金の文化を
：守るため
：伝承
：次の世代へ
：伝えるため
：縁結び
：地域を超えて
：世代を超えて



ようこそ、Deepな赤岡へ。赤岡っ子に愛されるおいしいモノの物語。

ドッパリつかって
分かったニャア...
by まりも

食事&トーク&郷土史&観光情報&おみやげ!?

国道 55 号線沿いにある創業 40 年の食料品店。生鮮食品からお惣菜、お菓子、日用品などの雑貨までそろそろ、地元ではおなじみの店ですが、近年店舗をリニューアル、地魚や地場産のちりめんじゃこをアレンジしたメニュー、地酒も楽しめる飲食スペースができました。店主眞仁さん考案の“ちりめんおこげ”はお客さんに「地団太踏むほどおいしい」とまで言われた看板メニュー。最近でも地元の製麺所の麺、ニラなどを使って、昔から赤岡で親しまれてきたドロメ（カタクチイワシなどの稚魚、生のちりめんじゃこ）のゆで汁を最大限に活用した、体に優しく、幅広い世代に愛されるB級グルメを続々と登場中させています。

そして「とさを」にはもう一つ、別の顔が…。^{ちくあん} 棕庵文学賞などを受賞した赤岡の名物詩人・郷土史家、^{のむら とさお} 野村土佐夫氏のお店として、スライドを使った絵金や郷土史の解説、史跡めぐりなどを行っています（要予約）。時には飲食スペースを使ってコンサートも開催。店内には近隣の観光などに関する情報コーナーも。「とさを」HPには野村土佐夫氏の活動やメニューに関する楽しい情報もりだくさんです。店主の一言ブログもぜひのぞいてみて下さいね！



オレンジと白の屋根が目印。
お食事はぐっと奥へどうぞ。

← 国道沿いの真っ赤な
看板が目印。

このあたりは歴史
と文化の通い道
塩の道の終点。
塩の道マップや
グッズも販売中。



知る人ぞ、知る
“ちりめん中日”
中華麺にじゃこの
出汁、合います！

外はカリカリ、中はふんわり、
“ちりめんおこげ”

おこげグッズも登場

喜んでもうたら
うれしいがよ！



昭和 40 年代、たくさんの人で
賑わうとさを商店

とさを商店
高知県香南市赤岡町 476-4
TEL & FAX 0887-54-3235
P ご案内致します
休み / 無休 AM8:00 ~ PM8:00
HP <http://tosawo.net/> * 商品、メニューは季節、
時期により異なります。
Mail info@tosawo.net



土佐名物
水晶文旦



土佐ジロー卵

Vol.
4

土佐の男が頑張る
食料雑貨
食事処
とさを商店

絵金百話

第二十四話 恩愛という名の大敵

おうみげんじせんじんやかた

もりつなじんや

近江源氏先陣館 盛綱陣屋

< 概要 >

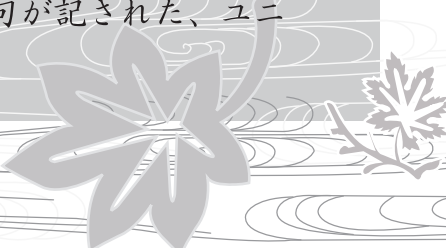
『近江源氏先陣館』は明和6年（1769）12月、大阪・竹本座にて近松半二・八民平七・松田才二・三好松洛・竹田新松・近松東南・竹本三郎兵衛合作の人形浄瑠璃として初演されました。

大阪夏の陣に取材し、設定は鎌倉時代、家康がモデルの北条時政と、豊臣秀頼をモデルとした源頼家との確執を柱に、宇治の方（淀）、時姫（千姫）、佐々木盛綱・高綱兄弟（真田信幸・幸村）たちの動きを絡ませ、複雑な構想を展開させています。なかでも「盛綱陣屋」の段は最も優れた場面として今日まで繰り返し上演されてきました。この段の主人公、佐々木盛綱は源頼朝に伊豆の流人時代から仕え、その挙兵に従い活躍した実在の武将です。承久の乱に際して佐々木一門は後鳥羽上皇方と鎌倉方に別れ、盛綱の子と総領定綱の兄弟は敵味方となりました。こうした史実も物語に巧みに取り込まれています。

歌舞伎の世界でもこの段は八段目に当たることから「近八」と称し愛され、首実検の場で、義理と人情に挟まれた盛綱の心理をどのように表すかが見どころとなっています。また三婆の一つに数えられる盛綱の母微妙も至難の老女役として有名です。

さて小誌では、第5号より絵金蔵が収蔵する芝居絵屏風23点を「絵金を読む」と題し、詳しくご紹介してきました。今回が現在の収蔵品の最後のご紹介となります。

本作は屏風ではなく横幟と呼ばれる横に長い紙製の幟ですが、やはり芝居絵をハレの日に飾るという土佐独特の文化のなかで育まれた形です。江戸後期からこの横幟は端午の初節句の折に門前の塀や室内にまわしかけ、楽しまれていました。現存する作例は多くありませんが東は安芸郡芸西村から西部では中土佐町辺りまで、長いもので横8メートルを超える大作が最近確認されています。本作は唯一、絵金の雅号と俳句が記された、ユニークな作品です。



よみがえる商家 某匠西川屋

— 西川屋の歴史

高知県下に七店舗を持つ老舗菓子店、西川屋。土佐藩の御用菓子司をつとめたことでも知られています。現在本店は高知市知寄町にあります。元は赤岡に所在していました。創業は元禄初年、十七世紀後半で、当初は現在の香南市夜須町で白髪素麴の製造販売を行っていたと伝えられています。創業からまもなく、西川屋才兵衛が現在の香南市赤岡町、横町通りを本拠とし、麴や菓子の製造を精力的に行いました。

有名な「ケンピ」は藩主御用の品だった白髪素麴、麴からヒントを得て製造し、藩主の賞賛を得たといえます。赤岡に店舗を構えた才兵衛により、その堅いところから「堅干」（ケンピ）と名付けられ、広く一般に売り出されました。堅いお菓子の少なくなった現在も、昔のままの製法を守り続けています。

— 絵金との関わり

赤岡に旧、本店を残す西川屋は芝居絵屏風の所蔵家の一軒でもあります。毎年七月の絵金祭りには、古い商家のたたずまいを残した

店舗で菓子の販売や店の歴史を物語る古美術の数々が披露されます。

昨年は当時から新たに絵金が描いた節句櫓が確認され、話題を呼びました。現当主は今年からこの旧本店を使った所蔵作品の展示を企画し、現在店舗の改修にあたっています。

また一つ、文化を伝える懐かしい空間が現代によみがえりそうです。



絵金祭りの日、賑わう赤岡店前



西川屋所蔵 節句櫓



近松半二 Hanji Chikamatsu



今回とりあげた『近江源氏先陣館』において、中心的な役割を果たした脚本家、近松半二（一七二五・八三）は多くの名作を残し、衰退する浄瑠璃界を盛立てた最後の作者と言われています。彼が手がけた作品は、『日高川入相花主』『由良湊千軒長者』『本朝廿四孝』『太平記忠臣講釈』『関取千両幟』『傾城阿波の鳴門』『妹背山婦女庭訓』『伊賀越道中双六』など、今日でも上演頻度が高い傑作ぞろい、本県に伝わる絵金とその弟子たちが描いた作品も多く含まれています。近松半二とはどのような人物だったのか、ここでその一端をご紹介します。

近松半二の生涯

近松半二は、大阪・竹本座の文芸顧問をつとめた儒者・穂積以貫の子として生まれました。放蕩した青年時代を経て、二世竹田出雲（外記）の門を叩き、竹本座の作者となりました。父・以貫と親交の深かった近松門左衛門に私淑したこと、その姓を名乗ったと伝えられています。

宝暦年間（一七五一―六四）前半は竹田出雲、三好松洛ら先輩と共に竹本座の新作に合作者として名を連ね、宝暦十二年（一七六二）には実質中心的に執筆した『奥州安達原』で評価を得て、翌年ついに立作者（座付き作者の筆頭）となります。

以後、時代物を中心にその才能を開

その人となり

半二は、のんきで物事にこだわらない人だったようです。天明七年（一七八七）、半二没後に刊行された『独断』では、自ら「我等元来生れ付たる不器用者にて、何を稽古して見ても埒明ず。其癖、根よはくして二三日の中に退屈して捨てて仕舞ふ故、是まで何一つおぼへたることなし。」と語り、また同書によれば「髻鬚種々穿半晒夏布：鼓歌一般的肝張音的調道」とあります。身なりに構わず甲高い声で滔々と話す、そんな風変わりな姿が浮かんできます。

しかし、演劇学者・河竹登志夫氏は、緻密に構成された彼の作品をみたととき、実際は極めて細心で数理的な頭脳の持ち主ではなかったか、と推測しています。



『伊賀越道中双六 岡崎』香南市赤岡町門脇家所蔵

新収蔵品のご紹介

絵金蔵は昨年七月、絵金に関わる白描・掛軸・印章等の寄託を新たに受けました。これらの作品は、代々土佐藩の御用表具師をつとめた高知市・美吉家所蔵もので、絵金の長男・房太郎が養子に入ったことから受け継がれてきた品々です。

絵金のひ孫にあたる美吉美雄さんの奥様、故・美吉幸子さんは、絵金が家近くの橋のたもとにあった蔵で、浄瑠璃を語らせながら絵を描いていたこと、長男房太郎も絵が上手で、小学生の頃、絵筆を何本も持つて岩見重太郎などを描いた、といった美吉家に伝わるエピソードを語って下さいました。

お預かりしたこれらの作品は、機会をみて、改めて展示室で紹介させていただきます。



お正月様図
軸 / 紙本着色 / 35.8×19.0 cm



若尾瀾水『海南先哲歎譜』（高知市民図書館蔵）に記載される印章

作劇の特徴

半二の作風の特徴としては、

- ・人間関係、場面構成ともに複雑極まること
- ・推理小説のような謎解きの多さ
- ・舞台に対位法を用いたこと
- ・色彩や舞台構成に視覚美を重視
- ・浄瑠璃本来の語りより、歌舞伎的な対話を多用したこと

などがあります。

さらに注目すべきはその登場人物の性格でしょう。『近江源氏先陣館』を例にとると、妻・子・多くの影武者などの命をためらいなく犠牲にし、味方の勝利という目的をあくまでつらく佐々木高綱、一方で兄盛綱は、封建社会の義理を踏み越え、たった一人の少年の健気な死を無にしたくない、それだけの理由で自らを滅ぼしてしまします。両者は正反対のように見えて、個人の意志や情を貫くという点で一致しているのです。

忠義のため人情を捨て去る場面が多いなか、今日の私たちも共感できる新しい人物像を創造した半二。彼の人物もそんな人物像に表れていたのかもしれませんが。

参考文献

河竹登志夫「近松半二の作風」『季刊雑誌歌舞伎』通巻第十八号 一九七二年十月
内山美樹子「近松半二のドラマツルギー」同右
園田民雄『浄瑠璃作者の研究』東京堂 一九四四年二月



おうみげんじせんじんやかた もりつなじんや
近江源氏先陣館 盛綱陣屋

横幟/紙本著色/132.8×276.9cm
香南市赤岡町原家所蔵

■ 南蛮流の懐鉄砲、受けてみよ！

盛綱が主人を欺いた申し訳に自害しようとしたところへ、「敵を見かけて自害とは臆したるか」と現れた和田兵衛。「逃しはせじ」という盛綱に向け鉄砲を撃ちますが、狙いはそれで鎧櫃へ。「汝が手にかけざれば不忠にあらず、…今又御邊自害せば鎌倉への義は立つべきが、是までに碎きし心は水の沓。」

■ 当座の褒美に残し置く。

首尾よく首実検をすませたあと、時政は上機嫌で、自らの着替えの鎧を褒美に、と櫃ごと残していきます。疑り深い時政はそこに高綱（実はその影武者）の首を取った榛谷十郎を問者として忍ばせていました。それを見抜いた和田兵衛に撃ち抜かれ、櫃から飛び出る榛谷十郎。

■ どうして居るぞ、只一目、見たい逢ひたい…

木戸口からここに、と小四郎に声をかける篝火。それを聞いた微妙に「叔は母親と内通して爰を抜け出る心ぢやな。それなれば猶助けられぬ」といっそう切腹を迫られることになります。

■ エ、侍の母の様にもない。

小四郎を取り戻そうと篝火が謝こんだ矢文に、時節を待てと答えた盛綱の妻早瀬。それでも小四郎のもとに駆け寄る篝火に長刀をかいこみ走り出て「ならぬならぬ相嫁の初見参長刀に乗りたいか！」と阻止します。

■ 尋常に死んでたも。

「真実親身は子よりも可愛い孫なれども、思ひ切って切腹させう」と、盛綱のたつての頼みに応えた微妙。しかし小四郎の健気さに涙し、また母を慕って逃げ回る姿にも心乱されます。自分もすぐに後を追ひ、三途の川を手を引いて渡るから頼む、とついには懇願する様子。

— あらすじ —

佐々木盛綱は坂本城を守る弟、高綱との戦に勝ち、その子小四郎を生け捕る。盛綱は、主人北条時政の狙いが小四郎をおとりとして高綱を味方につけることとみて、母微妙に高綱が子ゆえに不忠をはたらかぬよう、小四郎を切腹させてほしいと頼む。その頃小四郎の母篝火は我が子を案じて忍んでくる。家の中では微妙が小四郎に腹を切れと迫るが、小四郎は命乞いをし、母の声を聞いてさらに逃げまどう。

そこへ、我が子を奪われた高綱が憤る余り数万の大軍に討ち入り、首を取られたという注進が届く。盛綱は時政の面前で弟の首実検をすることになる。首は偽首であったが、これを見た小四郎は父上、と呼んで切腹する。全てが疑い深い時政を欺くための弟の計略だったと知った盛綱は、小四郎が幼いながら父の計略に従ひ、死を持って敵を欺こうとした心根を察し、首は高綱に間違いないと証言する。

時政が満足して帰った後、盛綱は主君を欺いた申し訳に自害しようとする。そこへ敵方の和田兵衛が現れ、今切腹すれば偽首であることが露見し、小四郎の死が無駄になると止め、かわりに鉄砲で時政が恩賞として残した鎧櫃を撃ち抜く。中から時政の間者、榛谷十郎が転げ出る。二人は戦場での再会を約束して別れる。

一横になが〜い、横幟一

横幟は寛政7年（1795）第11代土佐藩主山内豊興の初節句に屋敷で紙製の幟が用いられてより、同様の幟が流行したと伝えられています。紙製のためか、残された作品は多くありません。
本作は周囲に紐を通すための乳(ち)をめぐらし、右端に芝居の外題、中央の俳句で場面をしきり、左端には長寿を表すおめでたい言葉が書かれています。



菖蒲の葉で編んだ縄を地面にたたきつけ、大きな音の出たものを勝ち、切れたほうを負けとする菖蒲打ち。端午の節句に行われた男の子の遊びでした。もとは大地から悪い気を追い払うという意味合いがあったようですが、幕末の土佐では、それが単なる遊びをこえて、闘争にまで発展していたようです。
絵金はそんな現実の世界を芝居の世界になぞらえ、子どもを利用した争いなど無用、そんなメッセージを残したかったのかもしれない。



■ 只二親に逢ふまでは…

微妙に渡された袴を受け取り「申し婆様此袴にはなぜ紋がござりませぬ。…こりや私に腹切れとの死装束でござりますな」と利発に答える小四郎。しかし「父様母様にたった一目逢ふた上、せめて雑兵の首一つ取って」からと切腹を拒み続けます。全ては父高綱の企てを成功させるための演技でした。

物語る小道具
〜 切腹の刀 〜

のちに小四郎が切腹をする刀の「父を先立てて何まぎまぎと生恥をさらさん、武士の自害の手本を見せる」といい、刀をぎりりと引き廻して立派に切腹を遂げたのでした。

コレ最前の健気を覚悟忘れしか、
とても叶はぬ期になって、臆病者の名を取るがや…*1

【参考文献】
*1『文楽床本集』国立劇場 国華堂 1987年9月
*2『浄瑠璃作品要説<3>』国立劇場 1984年3月
*3『歌舞伎登場人物事典』白水社 2006年5月
*4『絵金展 土佐の芝居絵と絵師金蔵』高知県立美術館 1996年
*5『絵金蔵収蔵品目録』改訂版 香南市 2010年3月
*6近森敏夫『絵金読本』改訂版 香南市商工水産課 2006年3月
*7『坂本龍馬の時代 幕末明治の土佐の絵師たち』高知県立美術館図録 2009年10〜12月

